図書館だより

Vol.35 No.2（No.329） 2025.7.1
東洋英和女学院大学図書館

先生によるおススメ本

大学内には、いろいろな委員会[1]があります。そのうちのひとつ「図書館委員会」の先生方に学生が手に取りやすいおススメの小説について教えて頂きました。大学生活における、図書館の使い方・本の読み方に関するアドバイスは必読です！

生活のなかの読書と図書館の活用

図書館長：金沢 みどり 教授

人々が必要に応じて主体的に学び続けるうえで読書には大きな意義がある。
読書にあたり、新刊書を主に取り扱っている書店に対して、出版後数年以上経過した図書、および、現在は絶版になってしまった図書について、図書館に所蔵されていれば読書することができるというのが、図書館の社会的な意義の一つである[2]。図書館では、これまでに蓄積されてきた蔵書の活用により、利用者は幅広いジャンルの本に親しむことができる。

アドラーらは、読書には「情報を得るための読書」「理解を深めるための読書」「娯楽のための読書」というように 3 種類の目的があると述べており、これら 3 種類の目的のうち特に「理解を深めるための読書」に着目し、その読書方法について詳しく論じている[3]。

「理解を深めるための読書」は、読書の第一の目的として重要である。加えて、「蓄える」文化を担ってきた図書館が所蔵する資料を利用し、必要な「情報を得るための読書」や、本当に読みたいと思う本に巡り合い自由に読む「娯楽のための読書」というのも、読書の目的として大切である。

「理解を深めるための読書」は特に自発的に行う学びや研究にとって意義があり、その本をさらに入念に読む必要があるかを調べることを目的とする「点検読書」もその一部として考えられる。「情報を得るための読書」は情報活用能力の育成にもつながる。「娯楽のための読書」は読みたいから読むという読書ではあるが、それを一つの契機として、その後の読書習慣の形成や高度な専門的な分野の読書に発展していくことも考えられる。これら 3 種類の読書の目的は、これからの生涯学習社会において重要である[4]。

大学生活を通じて、豊かな読書生活を送るうえで、フィクションや同じ作家の本ばかりではなく、本学の大学図書館の活用により、読書の幅を広げ、ノンフィクションや新しいジャンルの本にも積極的にチャレンジされることを心より願っている。

---

[1] 東洋英和女学院大学組織図(2025.4）https://www.toyoeiwa.ac.jp/daigaku/about/data/soshikizu.pdf (参照 2025-06-09)

[2] 金沢みどり（2022）『図書館サービス概論　第 2 補訂版』学文社

[3] Adler, M.J. and Doren, C.V. (1972) How to Read a Book. New York: Touchstone. 日本語訳として、アドラー、M.J.・ドーレン、C.V.著、外山滋比古・槇未知子訳（1997）『本を読む本』講談社

[4] 金沢みどり・河村俊太郎（2023）『読書と豊かな人間性』勉誠社

高齢者理解に向けてオススメのノンフィクション

『私は三年間老人だった ： 明日の自分のためにできること』

26 歳の工業デザイナー、パット・ムーアは、1979 年から 1982 年までの 3 年間、アメリカ合衆国の 14 の州、116 の都市、カナダの 2 つの州で 85 歳の老婦人に変装して高齢者の中で生活した。その時の経験から、パット・ムーアは、工業デザイナーとして、商品を開発する上での重要な結論に達した。それは、ユニバーサル・デザインの考え方である。すなわち、ある商品やサービスが高齢者にとってよりよく機能するならば、それはだれにとってもよりよく機能するということである。この時のさまざまな体験が、その後のパット・ムーアの職業生活を成功に導いた。

本書では、パット・ムーアおばあさんとして、高齢者同士のロマンスにまで発展しかけた出会いがあったことなど、実際のエピソードに基づいて、高齢者の置かれている状況について、具体的に述べている。また、高齢者に変装したために招いた困難な状況にも、勇気を持って対処しようとしていることが記されており、読者も安心して読みすすめることができる。

特にオススメの章は、ウイットに富んだ「私のかわいい“孫娘”」の章と、高齢になるとはどのようなことなのかをしみじみと考えさせられる「デートの約束」の章である。

各章が独立しているので、興味のある章だけを選んで読むこともできる。また、わかりやすく親しみやすい文章であるので、ノンフィクションは苦手と思っている方にも、気軽に楽しく読み通せる本である。

超高齢社会を迎えた日本の社会で、高齢者を理解し、高齢者にどのように寄り添うべきかについて考える際に、ヒントとなる１冊である。

金沢 みどり 教授

名作は時代を超えた価値を持つ

『ギンガムチェックと塩漬けライム ： 翻訳家が読み解く海外文学の名作』

子どもの時からよく本を読んでいました。本が好きだったというよりは、本しかなかったという理由です。昭和に育った人間ですから、インターネットも YouTube もなく、ゲームは買ってもらえず、テレビは祖母の独占状態でした。いま私が子どもだとしたら、良くも悪くもネット漬けになっていると思います。

大学教員になって数十年、研究関係で本当にたくさんの本を読んできました。しかし今年の始めに、唐突に「仕事以外の本を読みたい。特に小説」という欲求がわきました。研究はともかく、それとは別の世界があったよなあと思ったからです。そこで今年は古典小説を 50 冊読もうと目標を立てました。

思い返せば大学時代の恩師は、「大学時代に本当にやるべきことは、名作と言われている本を読み、映画を見ることだ」と言っていました。名作は書かれた時代の空気感を伝えると共に、現代に通じる価値を提示しているからです。大学時代は聞き流していたのですが、今ならその通りだと思います。（私が大学時代にやっておくべきと考えるのはもう一つあります。自動車運転免許をとることです。）

名作ってどれ？どうやって選ぶの？という方のために、海外文学の翻訳家である鴻巣友季子の『ギンガムチェックと塩漬けライム―翻訳家が読み解く海外文学の名作』をおすすめします。この本は、『ライ麦畑でつかまえて』や『嵐が丘』など、英米文学を中心に名作を紹介するものです。『嵐が丘』は「家政婦は見た！」だ、とか、『幸福の王子』は自分のために働いてくれたツバメのことを考えない自己欺瞞者だ、など、鋭い語りで名作を紹介していきます。ここから始めると、次に読みたいものが見つかるかもしれません。

平体 由美 教授

読書で極上イマーシブ体験を！

『続明暗』・『偉大な罪人の生涯』・『三体』

学生時代、「本を読むこと」はイマーシブ体験だった。自宅のベッドにもぐりこみ、あるいは外出先のカフェで、公園のベンチで一瞬にして違う世界に連れて行かれ、私は周りの物音すら聞こえなくなった。専門書でない限り、小説や旅行記、詩集なら、読み始めたら最後まで読み切るという読書スタイルだったため、「朝読書」みたいな、時間を決めて少しずつ読むなどということはしたくなかった。その本の世界に入りきることで、脳に新しい回路ができ、こちらの世界に戻るたび、違う回路を搭載した新しい私になっていた。

30 半ばを過ぎたころから、そのとびきりのイマーシブ体験に残念な現象が起きてきた。たっぷりと読み切るまでの数時間をまとめてとることが難しい忙しさ。無理して時間を作っても、なんとなく先が読めてしまう、読み進めてもどこかで感じたことのある感覚しか起こらず、新しい回路がメリメリと作られていく感じが味わえない新刊書たち。成長というか老化というべきか、悲しかった。

しかし、悲しみつつも一方で、いつか読んだことのある感覚を自分に生じさせる本については、読書スピードの速さを活かして、「似た感覚を引き起こした以前に読んだ本」との比較読みや、あまたある名作の別著者による続編を味わうなどという新たな楽しみ方も見出した。夏目漱石「明暗」の続編「続明暗」は、水村美苗氏によるものだが、漱石世界をこのように再現できるのかとドキドキし、漱石を再読した。ドストエフスキーの未完の小説「カラマーゾフの兄弟」の続編を、なんと日本人作家の三田誠広氏が書いた「偉大な罪人の生涯」も「ほう、こうくるか！」と唸らされた。

さらに、最近久々のイマーシブ感に一気読みしたのは、中国の SF 作家劉慈欣氏の「三体」である。Netflix と Amazon prime で別々のドラマにもなっている。中国の文化大革命の場面から、宇宙人まで登場するというと荒唐無稽な設定のようだが、かなりきちんとした物理学の知識に裏打ちされて構成されており、科学や社会への問題意識もある。女性科学者が主人公で、様々な考察や描写も入り込める力量となれば、人が映像化したものなぞ観ていられない。久々に真夏の徹夜読書で、脳内回路がメリメリと作られ、その後の研究もモチベがあがったのであった。

学生時代は、イマーシブ世界へ旅する期間限定の特別チケットを持っている。比類ない美しい英和の図書館で、皆さんもぜひ期間限定、生涯に一度の読書没入体験を！

長谷川 かおり 准教授

本は過去・現在・未来を知ることができる

『秘密』

　一冊の本を何かに例えるとしたら、私の場合は「アルバムの中の一枚の写真」です。なぜこのような例えをしたかというと、読み終わった一冊の本には、その時の風景や自分の心情などが記憶されていると感じているからです。
ですが、私は勉強が嫌いで、本を読むことも大嫌いでした。そんな私にきっかけを与えてくれたのは、大学生の時に出会った先輩でした。先輩に無理やり書店へ連れて行かれ、「この本、面白いから読んでみて！」と満面の笑みで手渡されて、買ってもらった本が、読書をするきっかけとなりました。
　その本は、東野圭吾の『秘密』という本です。内容は、ぜひ実際に読んでいただければと思いますが、読み終わった後、私は一日くらい結末に呆然とし、考え込んでしまいました。しかし、「本を一冊読み終えることができた！」という、なんとも言えない達成感が湧いてきたことも覚えています。
　先輩は自分の好きな映画や音楽を勧めるくらいの気持ちで本を買ってくれたと思うのですが、私はあの時の先輩が見せてくれた屈託のない満面の笑みや、その時の情景、そして読み終わった時の考察や感情は、今でも忘れることができません。そういった読書体験が、最初に例えた「一枚の写真」のように、私の中に記憶されています。
　また、その本を自宅の本棚や街の書店、図書館などで見かけるたびに、私は当時の記憶が蘇ります。ぜひ、私のような体験を一人でも多くの人にしてもらいたいと思います。
最後に、その先輩からいただいた本に関する言葉を、皆さんに送りたいと思います。
　本は過去・現在・未来を知ることができる。
　ぜひ、人生の中で思い出となるような本に出会ってください。

藤田　光治　講師

【今回ご紹介いただいた本】※書影をクリックすると、OPAC の画面が表示されます

図書館だよりは図書館ウェブサイトからバックナンバーも見ることができます
https://sites.google.com/toyoeiwa.ac.jp/library/kankou/toshokandayori
（編集担当：池上）